

彝
玖
邇
之
王

しばいいやあ Siveeyeah
りゅうかう Lyeowcau

蕭々と『雨龍』。

老杉の陰翳夢昏く、幽邃たる眞神の古き街道を人は又龍蛇が田畑を這うに喩うるなり。

縄文の時代には海とを繋ぐ塩の道にありしことなど土地の者誰しも知るも毀たれし道祖神の石像が何れの神たるかはもはや知られず、その辻を過ぎむとすれば俄かに櫛や櫓や楠が雑ざり、椎や檜など一際鬱蒼とするに驚かされる。

異相を湛え、イずむ蕎麦居酒屋ありき。古色沈たりて、茅を葺きたる屋根に苔生す馨。逝にしへの匂いが眼にも映え、名にし負うかな、霖の如し。しかもその日は。

水を引きたる手漉きの和紙に、淡き墨を暈かしたかのよう寒々しき霧雨。乾かぬうちに濃さの異なる墨を点じて滲ませたかのよう、遠き藁屋根の納屋、鎮守の杜、古墳の雑木。かくも幽かに玄いとは言え、未だ午後四時。二十四歳の男が縄暖簾をくぐるには早過ぎた。

「へつらつしやい。 おつ、珍しいじゃねえかい。会合かい？」

「ええ。まあ」

店主に声掛けられて生返事。暖を期待していたが、店内まだ閑寂として冷え冷えしている。諦め顔で上着を脱いだ。

眠たげな眸で無精鬚、何の仕事もない、いつも同じ服。夏になるとTシャツにジーパン、秋はその上にトレーナー、冬にはその上にダウンを羽織るだけ。履物は毎日キャンバス地ハイカットのバスケットシューズのみ。平衛隆臥は家賃三千元、龜鹽湖畔の借家に住む。雑木の山を越え、田中を涉つてここまで二時間半とぼとぼと。

ぐつしより濡れて雫を垂らしながら九つあるカウンター席の、右隅から三番目に歎息とともに坐った。

「熱いのをください」

燗酒をちびちびして暫し。備前のぐい呑みのやや沈んだ茶褐色の土の地肌に見事な火櫛（緋櫛）が入っている。見飽きない景色だ。窯入れの際に粳米の藁を巻いておくと、そのアルカリ分が粘土の鉄分と溶け合って赤色釉をなす。これが斜めに掛かった緋色の櫛のように見えることからそのように呼び慣わすのである。

隆臥は親指の腹でその表面の箇所を撫でた。撫でながら指先で回す。

釉薬を使わず焼き締めする備前は土味も大きな悦びだ。焼いている途中で粘土が嚙んでいた石が爆ぜて跡を残すのも賞翫に価する。

景色と言えば雨脚が強まっていた。夕深くなった景觀を窓から眺める。思いに耽りつつ。

闇に浸され沈みいく目前の大木は濡れそぼる樹齡二千年の楠。くすのき

やがてハイヤーが勢いよく停止した。

リーヴアイスのアンティークを穿き、花魁おいらんの金欄きんらん緞子をガウン風に羽織つて翻すあまのかぶ天之哥舞伎が降りる。鬢たがみのような金髪を振り靡かせながら暖簾をくぐった刹那、鼻尖に当たる湯気に眉根を歪ませるも、

「よ、隆臥、早いな。相変わず有閑人つてえわけかい。

さ、有意義に過ごそうぜ。俺たちは高尚だ。ご立派だ。バラエティー番組なんか見やしないんだ。

今宵は『饗宴 シユンボンヤン Supponov』だ」

彼は席の真中にどかと坐し、文芸雑誌を上をに擲った。

「そしてこいつもくだらねえ」

芝居じみた動きで左掌を上に向ける。

「二部の国際的に売れている作家を除くと、中国の若者から見た日本の小説は読むと気が滅入るもの以外の何ものでもないそうだが。そうかもしれない。

なるほどって感じだな。言われてみればそうだ。そうかもしれない。

畢竟のところ」

彼は髪を撫で上げた。

「悪の起源は私小説さ」

そして両手を広げ、頭上を仰ぎ見るようなポーズ。

「かつて私小説が隆盛していた時代、トルストイの『戦争と平和』も、ドストエフスキ一の『罪と罰』も、フローベールの『ボヴァリイ夫人』も、高級は高級だが、結局、偉大なる通俗小説に過ぎない。結局、作り物であり、読み物である」とかいふわけのわからない批判があつたという話だ。つまり私小説つてえのは自分の身边にあつた些事瑣末事をうじうじと書き連ねて人生の真実を描き出したぜえって胸を張ってみせる小説のことだ。

以来、高尚な小説つてえのはつまらない小説じゃなくちゃ、っていうイメージが出来上がっちゃったのさ。面白い作り話は通俗的でくだらないってことなのさ。

昔、『パンセ *pensée*』で有名なパスカルが言っていたぜ。『本物は平凡で誰も褒めやしないのにそれをいかにも本物らしく描くと褒められる。画家とは何と虚しいつまらぬ職業だろう』ってな。つまり私小説家の目標は虚しいつまらないことなのさ。

だが事実を描くことなんて出来るのか？ 所詮文にした時点で主観が混じった作り話じ

やないのか。そもそも言語は写真のように事実を映し出せるのか。いや、写真や映像すら事実を写してはいない。控え目に言っても少なくとも事実のすべてを写し出してはいない。ああ、私小説家とは何と目出度い厚かましい職業であろうか」

そしてさあどうだいつて顔で隆臥の方を見る。やむなく頷く隆臥。哥舞伎満悦でさらに語るは、

「さあところだ、芸術とは何か。よく考えてみる。

何が人間を芸術に駆り立て支えてきたか、それをよく学んだ方がいい。

ラスコー *Lascaux* 洞窟の壁画を鑑みろよ。

フランス共和国の西南部ドルドーニュ県、ヴェゼール溪谷のモンティニャック村の近郊にある洞窟だ。この洞窟壁画は旧石器時代後期のオーリニャック文化のもので、アルタミラ洞窟壁画と並んでフランコ・カンタブリア美術と呼ばれるが、恐らくは呪術的、宗教的な意味をも含んでいたに違いない。当時は分別などなかったに相違ないだろうし、それが自然な姿だと思う。

今のようにすべてが分化している方が不自然なのだ。すべては人間の生の営みではないか。

いや、それはさて置き。

芸術は深い衝動であり、宗教であり、生きるための実践だ。美であり、陶醉であり、快楽だ。写生つてのはあったことをそのまま書くことではない。あったことをそのまま書けば真実というが、あったことをそのまま書ける奴なんていない。アリストテレスは「人間は模倣されたもの（自然（事実・真実・現実）の再現）を喜ぶ」って言ってるんだぜ。

写真は事実を写さないないし、絵も事実を描けない。小説も然りだ。いったい人間はあったことをそのまま認識しているのかという科学的な疑問もある。あったことをそのまま書けるなんざ、妄想さ。妄想三昧ってわけだ。いやいや、人生つてのは妄想三昧だ。人の営みのすべては妄想だからな。それも又善しとも言えるんだがな。事実の記述も作り話なのさ。詭弁と言うなら言え、呑気な連中だぜ。

芸術とは何か。真実とは何か。超越、恍惚、天啓の瞬間、身も裂き砕き天翔ることさ。

脱自 *ékotoung* のハムバ。

ダンテの『神曲 *La Divina Commedia*（神聖喜劇）』やシェリーの『縛めを解かれたプロメテウス *Prometheus Unbound*』の自由奔放でドラマチックな空想をたつぷりと玩味してみろ、と言いたいぜ」

哥舞伎の大敷衍を聞きながら隆臥は嘆息した。私小説にはその時代的必然性があったのだ。中国の若者たちもダンテやシェリーを求めているわけでもあるまい。そもそも物事を単純に難ずべきではないのだ。すべては複雑系的だから。それに何と言っても、所詮人は与えられた範囲を超えられない。我々は限界の中を生きるしかない。そうでなくては生活はない。

意識じゃない認識がないようにこの世界を脱せない。回し車を永劫廻る鼠のように。釈迦牟尼如来の掌の猿猴のように……

そんなタイミングだった。傘を折り畳みながら天平普蕭あまひらふしょうが入って来たのは。いつしか外は昏く、雨音が激しくなっていた。

すぐに様子を察知したのか、またか、という風に顰め、からかうかのように「哥舞伎、いったい、今日もまた何が気に入らなくて吼えているんだい？」

鼻を鳴らしつつ哥舞伎が、

「くだらない退屈な小説が多いのさ。俺には根底から興味がない」

それを聞いて普蕭は長いマッシュルームカットの髪を仰け反らせ、薄笑いを浮かべる。彼は大きな襟とカフスの附いたベルベットのフロックコート、ペイズリー柄のシャツを着ている。

「君の書くものは相当面白いんだろうな。」

ついでにもう一つ言えば、売れている作家には売れる理由があるし、君は素人だ。結局、それが結論のすべてさ。

君は読みもしないで勝手な妄想を抱き、頼まれもしないのに義憤鬱憤で身を震わせているんだろうな、いつもの如くね」

「へ。読まずともわかるさ。」

矮小化の時代だ。大空を覆い尽くし、大風を起こす鳳凰の翼は今ない。

崇高で高尚な精神主義は経済重視主義・実利主義・現実主義・実証科学主義によって寸断された」

次第に熱を帯び、蕎麦を茹でるために沸かした湯や爛酒などの湯気が満ちてくる。哥舞伎の前に爛酒を満たしたぐい呑みが置かれた。

普蕭がやれやれという表情で哥舞伎の左隣に坐る。

ここ『雨龍』は古くは眞神の郡の人々の集会所であった。

紀元前の時代、海の彼方から財宝を積んで日本に移住して来たと伝承される眞神の一族

の住まう地は古来富裕の郷里であつたため、年貢米に喘ぐ貧農の家などなく、農民と雖も皆大名のように豪気で、ちよつとした集まりのたびに蕎麦や酒肴を出すのが習慣であつた。戦国末期か、江戸時代の初め頃に調理場のある家屋を建て、やがてそれが店として営業する蕎麦居酒屋『雨龍』となつたのである。

その造りは茅葺の屋根が急斜で高く、煤けた太い黒梁が組み上げられ、天井張りがないために高いところが翳りに霞む。熱は上昇し、すきま風も入るし、晩秋以降は一向暖まらない。

哥舞伎は呑み乾した備前を攜き、俯いた。

「欲望が膨らみ、渴望が烈しく鞭打つて駈り立て、飽きることを知らず、より高度で鮮やかな対象化を求める。」

刺激的な視覚を提供する映像、炯らか画面、明晰な存在のあるサウンド、恍惚とさせる触感・香り、スピード・精巧さ・ヴィヴィッドなもの、感覚に鮮烈なすべて。

それは宿命なんだ。だから正しく求められなければならない」

そして梁の見えない頭上を仰ぎ、

「芸術は世界という存在の胸の奥で燦めき^{せき}炯らめく精神だ」

そう言い、注がれた備前杯を再び右掌に包んで^{あお}呷る。

「なぜならば芸術の完成とは神の示すところへ達することだからだ。」

完成された作品を作り上げることは美しい善行であり、神の意に適い、功德を積むことになり、幸福を導き、それは天国への階段だ」

無論彼が言う神とは眞神郡に古来暮らし、かつては大和朝廷と諍い、五八八年、^{ほほとり}火々禽の柵の斗^{たたか}いで敗れた眞神族の神、^{いあれずを}彝亞咽厨御のことだ。

普蕭言う、

「芸術が天国への階段……君は芸術至上主義者というわけだ」

「しかし無神論者じゃない」

「君の小説を読む者はいないだろうな。延々聞かされる君の自己満足しかない。無意味に難解で鬱々として未来も楽しみもなく、苦痛以外の何物でもない」

「芸術はただ神のためにある。」

ただ神のために俺は人間に興味を持つのか。芸術を愛するがゆえに芸術の質料（ビュレール^{byure}）である現実^{現実}に眼差しを遣うのか」

「現実の敗者が芸術や哲学に走るといふ説があるもの忘れない方がよい。」

特に恋愛敗者がね。

力は外へ向かうのが正当なのさ。内に向かうものはルサンチマン（怨恨）性が伴い、復讐的な傾向を持ちやすい。

さあ、ところでヴィンセント・ヴァン・ゴッホは幸せになったか？ ウジェーヌ・アンリ・ポール・ゴーギャンは幸せだったか？ ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトはどうだろう？ さあ、エドガー・アラン・ポオは？

パルテノン神殿のアテナ・パルテノス立像を造ったペイディアスの最期はどうだったろうか？

それとも彼らの芸術は完成に至っていなかったのか？」

「かもな。

ところで薙久なぎくさ簑から歩いて来たのか」

そう言ってまたぐいと呷る。

「いや。今日は向こうには行っていない。実家から歩いて来たのさ」

普簫も杯を乾す。

外で車の停車音がした。見ればレンジローバーから数人が次々降車する。「ひでえ土砂降りだあ」 雨を払いながら四人の男たちが暖簾をくぐり、それぞれ席に着き、送って来たレンジローバーは去った。「詩情の雨と、冬の哲学の叡智のために」と唱和して熱き清らかな酒で乾杯。

「うまいな。やはり酒は地元に限る。眞神川の清流で仕込んだ眞神の酒造米、雷龍が最高だぜ。荒れ狂う暴風雨も敵うものか」

そう言挙げたのは炎春ほのしゅんはる慶。燃えるような赤い髪で、濃い顔立ちに火炎のような眉毛、

哥舞伎や普簫とは同級生だ。店主も将に支度まさが整った様子。

釉薬全体に塗らず土味を見せる備前焼の皿に、滋味濃く深き酒肴が。笹あしに蕎麦が盛られ、磨り下ろしたばかりの山葵わさび、鮑、雲丹、生牡蠣や煮附けの魚は安房湾で漁られた鮮度の良いもの。山菜の天麩羅が揚がり、カウンターに居並ぶ彼らに供される。

さて、これだけ人数がいるなら座敷席で囲炉裏を囲めば良さそうなものを、彼らはいつもこうなのであった。

「そう言えば」

哥舞伎が言う。

「真まこと分は兎も角、裂いれつと叭羅蜜斗ばらみどはどうした？」

彝^{いの}之^の丕^ひ裂^やは眞神族の王家である彝之家の者であり、彝之家第五二五代当主である彝之爲^い弓^て阜^ふ飛^ひ也^やの長子である弓夢^{てむじん}人の長子である。また同源叭羅蜜斗^{どろげん}は代々貞觀正國寺^{じょうがんしょうこくじ}の住職の倅であつた。

あまやす
天易真兮は古来学者の家系である天易家の者で、同家は王朝の公式な卜占や占星術なども手掛ける眞神の名家の一つである。最近^{あまやす}は著述の推敲に勤しみ、人付き合いを断つていた。

哥舞伎の右隣に坐つた小太りの白舟大樂^{しろふねたいがく}が応える。なお、白舟家とは古来、眞神の海軍を司る家柄であつた。

「丕裂は遅れて来るよ。叭羅蜜斗はわからないな」

「そうか。真兮^{まことや}が来ないのは聞いていたが。

まあ、いいさ。兎も角食おう。喰らわなくっちゃ。生きることは喰うことだ」

それを聞き、隆臥は歎異の溜め息を落とす。

笑いつつ普蕭頷き、

「そうそう、ほら、食べなよ。暖まるよ。さあ、さあ、熱い爛酒だ。どうだい、なかなかの備前の逸品だ。

そら、ついで上げるよ」

古代ギリシアの宴ではまず食べてから飲んだ。その故事に倣うのである。

隆臥が啜っていた蕎麦猪口を置いて口を開いた。哥舞伎や普蕭の一つ年下なので丁寧語で話す。

「それはそれとして。

神が示すところへ……とは美しい言葉ですね。現実への諦めを抱く者にとっては郷愁のような言葉です。かつて少年時代に見た夏の夢のように美しく儚い……

ニーチェの『善悪の彼岸 *Jenseits von Gut und Böse*』の中で「神のために人間を愛する……初めてこのことを体験した者はどれほど舌が縛れただろう……」という一節がありますが……あ、いや。何でもあります。しかし。

そうです。神と言えば間もなく冬至ですね。眞神の太陰の儀をやる季節です。やはり陰の気が最大になるからってことなんですかね」

それには彝之龍^{いのりやう}肯が応えた。隆臥の一つ年下なのでその右隣、すなわち隅から二番目に坐っている。

「逆に言えば太陽の復活を祝う日でしょう。その日以後、太陽の飛翔^{フライト}時間が長くなります

から。古代ローマで流行したミトラース Mithras の十二月二十五日の祭儀の流れを汲んでいると考えられます」

その右隣には龍肯と同級の彝佐^{いささわらひ}早蕨。彝佐家は代々世襲大臣の家系であった。彼はカウンターの一番端ですきま風が最もきつい場所に身を屈めるように坐り、熱燗の入ったぐい呑みを両手で握っている。龍肯に尋ねた。

「その時代って、我々眞神族は既に欧州から離れていたんじゃないかったかい」

龍肯が首を向ける。

「ミトラースの起源はとても古いはずだぜ。インド・イラン共通時代に遡る神格だからさ。たぶん蕤^{みのくに}之国に王家のあった時代か、彝須灌斗^{いすかんとう}にあった時代じゃないかと思う」

哥舞伎も頷いた。

「ふむ、そんなところだろうな。蕤^{みのくに}之国は今のクレタ島、彝須灌斗はギリシア・マケドニア辺り。紀元前三千五百年から千五百年頃のことだ」

「蕤^{みのくに}之国と言えは」 早蕨が遠い眼をして言う、「僕の祖先が当時の王、海彝斗^{ういと}に臣下の礼を取った時代です」

その左隣の隆臥も、

「我が平衛家もそうさ。

その時期に王家である彝之家の近衛になったんだ。だから我が祖先は地中海の一族だったのだと思う」

三叉戟の家紋を持つ白舟家の大楽が言う、

「おいらの家は、それよりも前の時代、場所は今のリビア辺りだ。時代は紀元前四千五百年、王は彝衆斗^{いしゅと}の頃、我が一族は臣下の礼を取ったんだ。

ギリシア神話のアテナ女神のルーツがあると謂われるトリートニス湖と同定される戸璃^{とりに}兔邇栖^{とにす}でのことって聞いているよ。

我が家は強力な海軍を持つ一族だった。

彝之家が分家して同源家が立てられた時代でもある。胤^{たね}が途絶えた場合に同源家から世継ぎを出すシステムを構築した時代だよな」

「彝之家が軍事的に強化された時代だね。我が炎家もその時代だよ。」

春慶^{はるけい}がそう言えば、哥舞伎もまた、

「俺の天之家は紀元前六千年前、斐圍良之都^{ひえらのみやこ}にいた時代だ。その都はエジプトにあったと伝えられている。彝久那斗^{いくなと}が開いた時代だ。

その頃に普蕭の天平家は我が天之家から分家したんだぜ」

ちなみに炎家は炎の神アグニ *अग्नि* を信仰する家で、インドからトリートニスに来て眞神族に加わり、『尹陀羅の同盟戦士』と呼ばれた一族の末裔である。

普蕭が、

「さてこうやって語っていると、またあの問題に突き当たるな。

斐園良ひえらは今のエジプトに相当するが、王朝が最初に建てられたのはもっと昔、すなわち

眞神之国の時代で、紀元前八千年頃だ。

初代王である彝玖邇いくにが建国した場所はどこだったのか」

彝玖邇之王はどこにいたのか。眞神之国はどこにあったのか。眞神斗人が常に論じ興じてやまない話題だ。

余談だが、眞神族のことをなぜ眞神斗人と彼らが言い習わすかというと、先にも触れた五八八年（崇峻天皇元年）、眞神の王であった彝之昂弓乃いのあてないが飛鳥・斑鳩を撃てと檄を飛ばして眞神の貴族戦士が結集し、大和朝廷と火々禽の柵で斗った。この戦に敗れ、後には日本に従属することとなったのだが、アイデンティティを失わぬよう、国では敢えて自らを斗う人、眞神斗人と呼ぶのだ。

眞神の役としてその族名が日本の正史に初めて登場した事件であり、またこの年に眞神神社に今ある社が、以前から聖地として祭祀の場であった眞神山に建築された。

龍肯は彝之家の本家ではないが、彝之を名乗る王家の枝であり、由緒があり、けして軽んじられるものではない。現に、家の敷地から2世紀の遺構が発掘され、そこから彝之家の紋の一つである火炎輪昇降龍神天地指翼鳳凰之図かえんりんしょうりゅうしんてんちしよくほうおうを象った土器片が見つかっている。

焰の輪の中に鳳凰が左右に翼を広げ、向かって右の翼の尖で地を指し、左の翼の尖で天を指し、その鳳凰に昇り龍と下り龍が絡み、昇りは首を左に、下りは右に傾けて、遠目には火焰陣の中に卍があるように見えるものだ。これが別称「火円卍文くわゑんまんじもん」と謂われるのはその所以である。

「いつも同じ話になるな。人間ってえもんは、どうしてもアイデンティティを確かめなくちゃいけない生き物らしい。

いや、動物もそれぞれのやり方でそうなのかもしれないが」

そう言って哥舞伎が快活に笑う。早蕨が思慮深げに、

「結局は自己肯定の方程式なのだと思います。恐らくは生存への意志にそのルーツがあるのかと」

普蕭が微笑した。

「いいじゃないか、誰もシャーロック・ホームズが実在するとは思わないがシャーロック・アン *Sherlockian*（又はホームジアン *Holmesian*）は皆実在の如く語り興じて倦まない。我々はいつも大真面目に先祖のことをアレコレ自慢する。僕らの妄想RPGなのさ」
隆臥がボソリ呟く。

「それにしても初代王、彝玖邇^{いくに}がどこに建国したのか、興味は尽きないですよ。やはりナイルを遡上した辺りですかね。人類の起源はアフリカにあるようですから」

哥舞伎が大笑した。

「人類の起源は確かにそうだぜ。」

現生人類の共通の母と言えるミトコンドリア・イブがそれを証明している。だが彼女らがいたのは十六万年前 ± 四万年だ。彝玖邇が建国したよりも遙かに昔だぜ」

龍肯が、

「だから、エジプトの前がナイルの上流とは限らない。スペイン半島やアラビア半島であったとしてもおかしくない。アフリカ起源の人類は数万年前には既にベーリング海峡を渡っていましたからね。」

そう言えば現生人類に先立つ原人だって、既に世界のあちこち（中国、インドネシア、ドイツ）にいて、数十万年前には既に火を使っていたんですね。何か不思議だな。原人って、ほとんどゴリラみたいに見えるのに」

普蕭も頷き、

「ふむ。」

あまり意識されていないが、クロマニヨン人に限らず人類すべては少なくとも数万年前には今の我々と同じ『人間』になっていたはずだ。

むしろ知識や社会や環境が違うから同じと言ってもまったく同じとは言えないが、基礎部分は同じように考え、同じように感じる人間だったはずなんだ。

それから一応言っておくが、ゴリラもそう莫迦にしたものじゃないぞ」

彼はローランドゴリラのココ（本名ハナビコ）の例を簡単に説明した。有名な話なので既に知っているものもいたが初めて聞いたという者もいた。ココは世界で初めて手話が出るようになったゴリラで、サンフランシスコの動物園にいる。生後3ヶ月で病気にかかっていたときに手話を教わったそうだ。手話による様々な遣り取りやエピソードがあるが死生観が興味深い。ゴリラは死ぬときに幸せなのか、哀しいのか、怖いのか、どう感じる

のかと訊かれて「眠る」と答へ、死ぬとどこへいくのかとい質問には「苦勞のない、穴に、さようなら」と言い、いつゴリラは死ぬのかには「年を取り 病氣によつて」と回答したという。

そして最後に普蕭はこう附け加えた。

「しかし僕が言いたいの動物にも人間のような意識があるのだなどというような美しい主張ではない。僕が言いたいの僕らの感情や思考や概念や意志には古い起源があるということだ。考えてみれば当たり前だが、それは途絶えていないのだ。

考概や詩情は原人や猿人にもあったのだ。いや、その前のキツネザルのような原始的な猿の時代にも、鼠に似た哺乳類の時代にも、爬虫類・両生類・魚類・無脊椎動物の時代にも、それは連綿とあり、様式・形式やすがたかたちやあり方を変えてきただけなんだ」

哥舞伎が手を振った。

「わかった、わかった。おまえの言いたいことはそれほど新しくも珍しくもない。

かつてニーチェはこう言つた『理性も本能のうちに数えるべきだ』つて」

普蕭が微笑する。

「まあ、そういうことかな。

我々の崇高な諸概念も植物が光合成をするのと大して変わらないつてこと。自然現象の一つで、ロゴスの欠片もない。西欧の言うような本質 *essentia* やアイデア *idea* などなく」
早蕨が尋ねた、

「本質？ アイデア論は知っていますけれども。

あのプラトンの提唱したやつですよ。例えば『この世には純粹な円形など存在しない。また同じ円形はひとつもない。それなのになぜ人は円という数学的概念を持ち得るのか。つまりそれは純粹な、正しい、あるべき原型の世界がどこかにあるからだ。現実はその影に過ぎない』的な考えですよね？

確かに現実に純円はないし、同一の円も存在しないから、円という概念、標準的な円の概念を持っている、つていうことは、まあ、不思議ですよね」

龍肯が言つた、

「補足すれば、魂によつて洞察された純粹実体、真の姿、事象本来の本質的原型みたいな意味ですよね」

「まあ、プラトンも時代によつて若干のブレがあるが、そういうことだと思う。じゃ」と言つてから威儀を直し、隆臥が、

「二分間講義ね。」

本質つてのは分割も変更もできないそのもの自体、(理念的な)実体、その存在がその存在であるための絶対的な特性のことだ。

アリストテレス的には、主語でしか使えない基体 (例えば、犬は動物である、と言えるとき、動物という考概は基体ではない) のことで、彼はこれを第一実体と呼んだ。

事象の真実在性を支えている実体、それが本質的に存在するものと言われる」

哥舞伎が拍手する。

「ブラボー。」

しかし世俗世界では誰も興味を持たない、忘れ去られた、廃れた知識だ。

誰しも恋愛の機微や都会を生きる孤独や疎外感・ニヒリズム、寂しさや『ふとした日常を生き生きと捉えた』が大事なのか。

あはは、小心の世界さ。『汝の心を小さくせよ』ってね。非常に世知に長けた知恵だね。

この世は生き残れば善い、生き残ることが正しい、だけの世界になってしまった。

はつきり言おう、生きるということは生存するということではない。

恐竜の流行らない時代、芸術も商業主義。家族が大事、生きてりやそれでいい、素敵だね」

しかし大楽が水を差した。

「それは兎も角。彝玖邇が建てた眞神之国はどこにあるんだろうな」

大食漢で肥満気味の彼は言い終えると、真中の席で、豚の角煮を頬張りながら焼酎を痛飲する業務を続行する。

龍肯が崇高な表情を浮かべ、

「彝之家に残る資料によれば……」

皆が首と耳を傾ける。眞神山に住む本家ではないにしろ、彝之家の、すなわち王家の者が威を正して言うのであるから。

「『大眞神書経』の梵字貝多羅葉版 (椰子の葉で作られたもの) とヒエログリフ・パピルス版と楔形文字タブレット版が眞神山の御社、すなわち彝之家の本家には收藏されています。」

まあ、あと大理石や玉石の板に黒曜石や孔雀石や瑠璃 (ラピスラズリ) や金やルビーで文字を象嵌した豪華版もありますが……

これはそんなに古い時代のものではありません。おそらく澳門滞在時代に作られたもの

ではないかと言われています。

パピルスや粘土板や椰子の葉の文書から眞神の一族は文書とともに大量の財産を積んでエジプト、地中海、ギリシア、インドを渡った想像されます。

それら文書によれば第百一代王、いくなと彝久那斗は自らの父祖がニムル邇矛柳大河を下って来たと記述しています。ニムル河とはナイルのことではないでしょうか」

「だとすればやはり上エジプト以南っていうことか。ヌビア人の国。もしかしたら中央アフリカ？」

早蕨が龍肯に問い質す。問われた者は問うた者を振り返り、

「可能性はあると思うが、証明できない」

普蕭が重ねて問う、

「川下りの前の時代の記述があつたはずだ」

龍肯が頷き、

「ええ、あります、それは」

哥舞伎が口を挟み、

「ちよつと待て。『大眞神書経』は俺も読んだ。確かに川下りの一節よりも前に、〃白銀に輝く神の家を下りき〃とかなかったか」

普蕭が沈鬱な表情、

「そうだ、僕も読んだことがある。考えようによつては〃神の家〃って」

それを聞いて春慶が爛酒に噎せ、

「おお、そうか！ こいつは凄いぜ。信じられるか、おい、キリマンジャロがマサイ人からンガジェンガ（神の家）と呼ばれているのを、おまえら知っているか」

龍肯が言う、

「それは知りませんでした。」

〃没陽のごとく神炎が墜ち、白銀に輝く神の家の頂に降り立つ。炎のごとく燃え立つ。雷霆のごとく轟き、強く輝く。神正義で世を照らし、善義に満ちて真幸まさきく数千年。遂に再び没陽のごとく炎は白銀に輝く神の家を下りき〃

というのがその一節です。キリマンジャロと思えば辻褄が合う」

哥舞伎が腕を組む、

「ほほう。」

彝玖邇が言挙げてから当代彝之家いのけ本家主、彝之爲弓草飛也いのいてふひやまで五二四代、推定一万年

前だ。紀元前八千年頃。

そう言えば『眞神紀』に附録されている叙事詩篇『眞神紀之頌誦』に「森深く平らかなる土地、无御帷の邑」というのが出てくるが、それもアフリカっぽいな。

森には師伊牙という魔神獣がいて、これを斃することが戦士たる成人男性の証とされていたが、彝玖邇はわずか八つの歳でこれを成し遂げ、斗いの神と崇め奉られ王になったという例の物語の一節だ」

龍背も、

「そうです。

王は齢百十一のときに神彝亞咄厨御の神奥義を欣求して霧真白之御山の頂に端坐し、太陽から究竟を得た。そして斗神王は聖神王となり、国名を眞神（彝）と改めた……

神聖者となった彝玖邇王は『眞神本義』を口伝して石板に刻み彫らせ、九重の聖櫃に収めさせた……国は栄えて千の民は万の民となったと言います。

その書の主意は「爲以義（義しいという事を為せ）」ということでした……」

哥舞伎が頷く、

「きりましろはキリマンジャロとも取れる」

しかし普蕭は強く瞼を閉じ、顎に手を当てて、

「いやいや、ちよつと待ってくれ。その手の説には昔から疑義が唱えられ、僕にも疑義が当然の如くにある。

だいたい、いくら何でも出来すぎていないか。我々はいつも大真面目に議論し合うが、眞神以外の場所では笑止千万な与太話以外の何ものでもない。

種々の經典が偽典ではないとしても、古い原典のすべては古代眞神語で書かれていたはずだ。また特に古いものには一部に眞神文字もあるという。

眞神文字も眞神語も公式には認知されておらず、正式に学究する学者もなく、未だ学術的な研究もなされておらず、ただただ地元の素人研究家がいるのみ。なるほど古代学者の家柄の者もいるが、正確さ精密さ確立された手法の巧緻さ情報収集の広範さなどなどではとても現代の欧米の学問には及ばない。

つまり我が方の研究者とは地元の素人郷土史研究家程度でしかないのだ。翻訳は精度の高い完全なものではないはずだ。

間違っていたり、曲解されていたりするなどの可能性を否定できない。

書肆文雅堂主人の郷土史研究家、天之薩埵羅門之丞が解読し、訳した本を原点として僕

らは信じているが、研究機関が権威ある学者の監修があるわけでもなく、その根拠は脆弱だよ。

千メートル級の嶺と嶺の間を綱渡りするような心地だ」

春慶も急に顔を曇らせ、

「ううむ。残念至極。古代眞神語って調べようがないからな。

さすがにどこにも研究者なんかいないし」

早蕨、

「そうやって考えるとまったくでたらめでも誰にもわからない。

思い起こせばその手の偽典って世界中にたくさんありますよね。眞神の歴史そのものも嘘って可能性も」

「おお、何てことを、貴様！」

と春慶が声を上げると、大楽もまた眼を丸くし、

「そうだよ、パピルスはどうなるんだよ」

しかし普蕭がまぶたを閉じたまま、

「いや、そんなものはいくらでも偽造出来るさ。土産物屋にもある」

哥舞伎が薄ら笑い、

「なるほどな。俺らは何で眞神を信じているんだろうか？」

大楽は呆れ顔で、

「おいおい、そこまで言うか」

「信義に悖る^{もと}」

そう言う春慶に眼もくれず、普蕭が、

「証拠がなければ否定も肯定もできないというのが、論理的思考の導くところだ。それ自体が正しいかどうかは誰にも確認のしようがないが……

なぜならば永劫の問いに陥るからな。だから誰も問わない。

問われないが問えば永遠のラヴィリントスに陥ることは必定だ。そもそもそれが正しいかどうかという一連の論理の運び、そのスキーム自体が論理的思考だからだ。論理的思考によつて論理的思考を批判することは自己矛盾だ。

但しこれが自家撞着であるという判定がやはり論理的思考の方程式から導き出されていることをも考慮すればもう収拾がつかない、手の打ちようがない。だから我々は与えられた範囲までしか分析できないのだ。

よって、僕らが強いて現状を正確に言い表そうとすれば僕らの限界は「是も非もない、まったくのニュートラル、零だ」って感じかな。或いは「非意図的に沈黙をすること」かもしれない……」

大楽が首を横に振りながら、

「めんどくさい話はよせよ。」

もし捏造だとしたら、大和民族と闘いは敗れた祖先の意地ってことなのか。歴史的・民族的な捏造って、だいたいそんな感じだよな」

暫し沈鬱な瞑黙。

哥舞伎が眼を開けて双眸を異様に強く燦めかせつつ言う、

「真偽を確かめるか」

龍肯が質す、

「いったい、どうやってですか」

「知れたことよ」

そう言つて哥舞伎は杯を呷る。

「眞神の総本山へ行くのさ。叭羅蜜斗に電話しよう。まだ白面のはずだ。いつものじゃないくてダッジバンで来いと言え。人数分の雨具と傘とを持てな。」

さて、久々に彝之本家を表敬訪問するぜ」

それを聞いて春慶が立ち上がり、

「是非そうすべきだ。真実を、真の答を、真の現実をこの腕に抱くべきだ。無論、皆行くんだぜ。苟も眞神斗人を名乗るならば真を貫くという義務を果たせ」

そう言い放ち、神厳な面持ちで言挙げる。

哥舞伎が鼻で笑い、普簫は面を逸らして肩を疎め、大楽が声を上げて嫌悪すも、隆臥は嘆息するのみ、龍肯が逡巡しつとも言わず、早蕨は額に皺を寄せたままで、決定的な反対をする者はなく、言挙げのとおり実現されることとなった。

貞観正國寺は畝邨村にある。畝邨は眞神村の西、眞神郡の一つだ。

貞観三年（八六一年）四月に福岡の直方に隕石が落下し、同六年（八六四年）には靈峰富士が噴火し、（所謂、貞観大噴火である）民衆の心は動揺し、蝦夷の眞神で叛逆が起こると流説され、貞観八年（八六六年）三月、大内裏の正庁である朝堂院の正門（応天門）が放火されて炎上し、白河殿すなわち藤原良房公（延暦三三年（八〇四年）―貞観一四年（八七二年））が古代名家の伴氏を流刑に追い込んだ応天門の変の勢いで、眞神の彝之家に仏教

への帰依を弔為のない証として命じ、同源家がその仏門を宗とすることで折り合い、貞観正國寺が建立された。

同寺の宗門の旨は真言宗すなわち『大毘盧遮那成仏神変加持経 *Mahāvairocanaḥśam-bodhivikurvīdāśiḥānavaiṣṭyāsūtrendrārāja nāma dharmaparyāya* (大毘盧遮那成仏神変加持方等経の帝釈天と名される法門)』『初会金剛頂経 *sarvatahāgatatattvasaṃgrahaṇ nāma mahāyānasūtram* (一切如来の真実を集めたと名される大乘經典)』のうちの『大樂金剛不空真実三摩耶経 *adhyardhaśatikā prajñāpāramitā* 『百五十頌般若』大いなる樂は金剛のごとく不変で空しからずして真実なりとの仏の覺りの境地を説く経』を堅持する真言陀羅尼宗だ。

電話を受けたとき、叭羅蜜斗は金堂の不動明王坐像の前でベースギターの練習をしていたところ。

「おう、わかった。

すまないな、今行こうとしていたところだったんだぜ。そういうことならオレは呑まなくても構わねえや」

二十分後、ダッジバンのオール・ホイール・ドライブ (四輪駆動) で叭羅蜜斗は東征して来た。午後七時十分。ちなみに車は八人乗り。

春慶のスマートファンが鳴って、

「待たせたな。オレだ。来たぜ、戦車の手綱を握ってな」

「叭羅蜜斗からだった。店の前に着いている。さあ、立てよ」

「じゃ行くか」

というわけで待っていた連中が次々列をなし、縄暖簾をくぐって外へ。地面が掘削されて壊されそうなドシャドシャ轟音の雨。

「ひでえ。

ほんとに行くの?」

「がたがた言うな。

お前も眞神斗人だろ、大樂。先祖が泣くぜ。さあ、一気に行くしかない。お前が先頭だ、行け!」

その号令で一丸となって飛び出す。

大樂は首を竦ませながら中列席の左奥に滑り込み、

「ああ、びしょ濡れだ。

ほっ。このタオル使っていいか？ おお、これか、最近購入してフル・カスタマイズしたっていうのは。

豪華だね。革張りのシート、マホガニーのウッドパネル、繊細な金細工の装飾にマープル（大理石）、こりや最高だ」

車は金に飽かして改造し、その内装はローマ皇帝のように豪華逸楽壮麗だった。

次に春慶が飛び込んで大楽の隣に坐し、普蕭が後列席の奥に坐る。

「酷い雨だ。バケツをひっくり返してもこんなに濡れない。

おっ、タオルか、サンキュ、大楽。ああ、ここはまるで王宮だな」

助手席に坐って雫を払いながら哥舞伎が言う、

「さあ、眞神山に向かつてくれ。彝之本家だ。ゞ裂に会いに行くのさ」

さて乗車に際して若干隊列の進行が渋滞したため、並んで待つてぐしよぐしよの隆臥・龍肯・早蕨は、

「わあ……っ。さ、最悪です」

叭羅蜜斗は摩可般若波羅蜜多心経にその名の由来するが、金髪のスパイクヘアで、七十年代のパンクロッカー風、正確に言えばジョニー・ロットン *Johnny Rotten* のコピー、未だに裂けたTシャツを安全ピンで繋ぎ留めるファッションを止めない男だった。

操縦席から後ろを振り返って訊く。

「いいか。行くぜ」

車は縄文の時代に塩の道であった街道を出発した。塩は安房湾の塩を指すが、古代においては龜鹽湖が深い入江の奥にある湾であったため、その名のとおり塩の産地でまさしく塩の甕であった。

「うわ、ワイパーが効かねえ。道が見えないぜ」

「か、何も見えないや。叭羅蜜斗、田圃に落ちないでくれよ」

それでも兎にも角にもフルサイズのアメリカン・ヴィークルは慎重に車輪を転じた。航海のようであった。怒濤のような雨のために。

古街道をどうにか進むうち、平らかな田の中の籠盛こんもりした森、普蕭の実家である天平家の本家が島のようにその姿を横たえる場所に来た。旧家の灯が雨に霞んで朧に見える。金と黒漆塗りで荘厳された宏壮な唐破風門は見えない。

ゆっくり走る自動車はまるで祭典の日の神輿のように、静々と進む。

やがて水田の尽きた処に着いた。そこはあたかもフィヨルドの海岸線のように、山林と田

圃が境を接している。実際、縄文中期辺りここは海であり、フィヨルドであった。先ほど過った普肅の家は比喻でなく入江の小さな島だったのである。

その丘の上、中段、又は丘と丘の狭間の溪谷に沿い、いくつかの家々が石垣の上に白き塀と瓦屋根を連ねて聳え立っていた。天之家^{あまの}本家及び分家である。すなわち陸地から海を睥睨するように見張る岸壁の要塞だった。

かつては海に落ちる川であったであろう溪谷がいくつもあり、それに沿って登坂道が続く。一つに分け入った。

四輪駆動車は路面をがっちりグリップし、溪谷沿いの細道を登る。登るほど谷は深く険しくなった。

「ああ、本当に慎重に頼むよ、叭羅蜜斗」

「わかってらい。さつきからうるせえぜ、大楽。オレだって溪に転落なんてまっぴらごめんや」

しかしそんな遣り取りもほんの僅か。数十mも行かぬうちに道が尽きた。村の真奥、聳えるのは独峯たる眞神山である。

それは独虎白龍岳や龍背鬚峯などの山々を背に屹立している、はずであった。今は漆黒の闇のために見えない。しかし聖なる御山の、荒岩を粗く積んで出来たような縦長の立方体型は疾風怒濤の漆黒の中でもくつきりと感じられた。

またその山を覆うように、びっしり樹木が繁茂し、所々に巨石や大巖が剥き出している様子なども、彼らにはまざまざと見えるような気がする。

眞神の山は山と云うよりは樹木の生えたエンパイア・ステート・ビルディング (the Empire State Building 「帝国州ビル」) のようであった。

岩が剥き出されている場所では松が横枝を伸ばし、他の場所では楠や樺や櫟や檜や辛夷や檜や榎や椎が鬱蒼としている。そしてその廻りを幅10mの眞神川が城の濠のように囲み、激しく流れて、永遠の聖域を守衛していた。

その眞神の御山の緑の雲霞に包まれ、いくつかの豪壮な、威々しく厳たる木造建築が岩棚に階層を成すかのように数軒、それが彝之家本家の屋敷だ。その敷地は眞神山にあつて、石を累ねた垣^{かき}に周囲約0.7kmを囲まれている。

山が垂直に屹立しているため、石垣はまるで松の菰卷きのように見えた。

標高三百九十九m、剣の如くに峻嶮な山頂には神が降臨するとされる磐座^{いわくら}と縄文時代の祭祀の跡があり、神彝之眞斗^{カムイノマト}が王都彝玖鷲^{いくろ}を築いたと伝承される。磐座は石刀型の巨石で、眞

神の御山のミニチュア版のような形。

「さて着いちまったぜ」

叭羅蜜斗がまたコックピットから振り向いて言う。

「降りるんだ」

哥舞伎がそう言い切った。

「じゃ、早蕨、ラゲツジス・ペースにある傘と雨具を出してくれ。三度笠と蓑が人数分あるはずだぜ」

叭羅蜜斗がそう言った。

三度笠とは竹の皮や菅で編んだ円形のもので、差すのではなく、頭に被るものだ。蓑とは藁を編んで作った外套である。皆が皆、江戸の旅人のような姿になった。

「何となく気分が出てきた」

隆臥が言ったが、早蕨は、

「冗談じゃないっすよ」

「早蕨、莫迦なことを言っちゃいけない。真理の探求には艱難辛苦が付きものさ」

春慶が真顔で言った。

激しい雨は風とともに撥ねが膝まで濡らす。昔の雨具など無意味だ。いや、現代ものも同じだが。しかも今度は先程のようにちよんの間、濡れるだけでは済まない。門から屋敷までは距離がある。車の中でそそくさと身支度を済ますと、全員がびしょぐしょ覚悟で外へ出た。聳える疊之家屋敷の門は切妻平入であった。

檜皮葺のその屋根は棟の部分に近くなるほどに傾斜が急になり、天を衝くようにせり上がって見える。逆に下方にいくに連れて角度は緩くなり、末は平らかに広がるようになっていくのであった。すなわち流造の体を做す。その姿は迫るように見え、威風堂々として神威があり、土地では龍門と呼ばれていた。

土砂降りの暗黒にあっても燦然たる赫奕を皆が仰ぎ見る。

「こういう土砂降りの良いところは」

哥舞伎が言った。

「最初に濡れちまえば、これ以上濡れようがないところさ」

「くだらねえ。さっさと行こうぜ」

叭羅蜜斗が唾してそう言うと、普肅も呼応し、

「そうぞ。」

濡れ方は同じでも体温はどんどん奪われていく。これ以上奪われなくなったときは……死だ」

さて門をくぐると川を渡る橋だった。

これを龍爪橋と謂った。現在の橋はレース lace のように鉄を瀟洒に編み込んで空架されているが、かつては木の跳ね橋であった。

当時の橋梁は神社の海老虹梁のような形状の木材を組み合わせ、半ば折り畳むように収納される形式の、世界でも珍しいもので、見事な木彫が満艦飾に施され、その奇観が龍爪のようであったことからその名になったのである。

哥舞伎を先頭に癡之家である龍肯が従い、叭羅蜜斗と普蕭が並んで、春慶、大楽、隆臥、早蕨の順で進む。

橋の中央にある二重楼門（上層階のみならず、下層階にも屋根の附いた楼門）の下で一同は若干休憩。この殆ど閉じられることのない門付き門扉の左右には門衛用の詰め所があり、門の二階部分に繋がる階段がある。二階の楼は華美極彩で、欄干を備え、瓦屋根の四隅が尖り反り上がっていた。

「さあ、行くぜ」

哥舞伎が再び促す。誰もがもう、何のために今歩くかがわからないような気分になっていた。

龍爪橋を渡ると第一の岩棚に着く。

そこには高さ 15 m の石垣を切って造った櫓門があり、櫓門をくぐると石垣で囲われた四角いスペースに入る。

「確か、次は高麗門。先は長いな……」

大楽が嘆息する。

左手、櫓門とは直角の位置に石垣を切った高麗門があった。

ただしこの高麗門は左右に砦を持ち、砦と砦の間とが橋渡しされて兵を伏させることができ、櫓門に匹敵する防護力があつた。

高麗門をくぐると短い板橋で、狭い岩棚に着く。そこは鎮守の杜のように鬱蒼とし、清流が瀧のように岩迸って流れ、眞神川へと落ちていた。豪雨のうちにも音が聞こえる。傍らには铸铁製の龍首があり、それは口から清水を迸らせる手水場であつた。

そこから葛折りの狭くて古い、朽ち毀たれ苔生した石段が続く。

登り切ると鬱蒼とした、暗くて狭い岩棚で、縄文時代の城砦門があつた。巨石の柱に巨石

の屋根を載せたものだ。

くぐり、吊り橋を渡って大きくて開けた岩棚に着く。

通常であれば高くて傾斜の急な尖った屋根の母屋が見え始めるはずであった。進む。彝之家の広大な母屋の前に立った。

正面玄関は大きく、切妻破風である。中に入ると龍の画かれた衝立があり、その奥は天井の高い板の間になっていた。だが、行き着く先に壁はない。そのまま屋外に抜け、ただ廻廊があるのみであった。

廻廊の廻る神前庭の正奥は檜皮葺の弊殿となっている。内部は閉ざされて見えないが、捧げ物を献上するための無垢材の臺があるはずであった。

だが、その弊殿のさらに奥にあるべき本殿はなく、ただ於上^{うえふかずのみかど}不葺御門、すなわち大鳥居が立っているだけである。そこには荒々しい大巖の数々と岩に根を蔓延らせる老樹の群生があるばかりで、あたかも眞神山頂にある磐座を直截崇め奉らせるかのような造りになっていた。

ちなみに鳥居は三輪鳥居（明神鳥居の左右に小さな明神鳥居がある形式。明神鳥居とは笠木の下に島木があり、左右端が反っている形式。笠木と貫を額束で繋ぐタイプが多い）に似ていたが、笠木の反り具合が一般に見られるものよりも著しかった。

以上が社を兼ねた彝之家母屋の構図であるが、神社建築の構成を楼門・廻廊・幣殿・本殿に分類する見方に従うならば、母屋屋敷はまさに楼門の役割を果たしているに相違ない。また、俯瞰すると左右翼が直角に折れ、全体として口の字型をしているため、廻廊を抱くような形になっていた。

ちなみに、鳥居から正面玄関までを聖なる神の道とし、家人や来客は正面の左右隣にあるやや小振りの唐破風玄関を使うこととされている。

その右玄関で笠や蓑や履物を脱いだ。

ずぶ濡れのまま框を上がって十歩進むと左右に伸びる畳敷きの大廊下に出る。右が大御社としての公的スペースで、神社の各種施設となっていた。左は彝之家の居住区へと続いている。右廊が一般の眞神斗人用で、左廊が彝之家専用というわけであった。

なお、眞神斗人であれば誰でも真直ぐ正面へ進んで廻廊に至り、幣殿で参拝することができる。

一同は右廊下を向いて立ち止まった。そちらの方に無垢の檜材で調度された奉献の間があり、数々の歴史的文献や遺物とともに、眞神神教の教書『大眞神書^{だいしんじんしきょう}経』の梵字貝多羅葉版

やヒエログリフ・パピルス版、楔形文字タブレット版も収められているからだ。

人を呼ばわり、用件を告げると、すぐにベ裂が出て来た。

第五二四代族長の彝之爲弓阜飛也いのいてふひやの長子である彝之弓夢人てむじんの長子である彝之龍頌蘭りゅうせいらんの長子である彼は細面に鼻が高くせり出し、肩まである狼のような蓬髪、いつもよれよれの袴姿である。

「おう、話はわかった。だがおまえら着替えが必要だな。そのままじゃ風邪ひくぞ。いや、既に早蕨や隆臥はくしゃみが止まらないし、哥舞伎も春慶も鼻水出しているし、大楽と龍肯と普蕭は震えているじゃないか。ああ、少し待ってくれ」

三六畳の広間に通され、皆は待つ間に濡れた服を乾かし、着替えを受け取った。酒も振舞われる。

「ああ、幸福だア」とは大楽。

皆の準備を見届けるとベ裂が、

「さあ、行こうか」

一同奉獻の間に入り、梵字貝多羅葉版とヒエログリフ・パピルス版と楔形文字タブレット版をしみじみと眺めた。

「真偽なんてわからないな。」

どれも本物にしか見えない。ガキの頃からオレらはこれを見てるんだ。もう頭に擦り込まれているよ」

叭羅蜜斗がぼやいた。

「往々にして真実とはそういうものさ」

普蕭が皮肉に微笑む。哥舞伎は腕を組んだ。

「御山に登るか」

「えっ」

誰もがそう言った。無理もない。この天候である。

ベ裂が即座に否定した。

「天候が悪いせいもあるが、意味がない。そんなことをするぐらいなら一層……」

「いや」

哥舞伎も即座に否定し、

「奇跡が起こるさ。行動こそ神、現実こそ真実だ」

ベ裂は最初呆気にとられたような表情をした。しかし、笑い出し、

「ふん。」

まあ、好きにするさ。結局、人間はやってみないとわからないんだ。

考概なんてものは理解でもなんでもなく、ただ感覚に擦り合わせて出来上がった『納得』という心理的な現象なのさ。

すべての存在は、実在も、ただの感情だぜ。つまり実存なのさ。実存は本質に先行する、
つて至言だぜ。

畢竟はアドレナリンやドーパミンに過ぎない」

ベ裂はそう言い放った。隆臥が泣きそうな諦め顔で言う、

「行きましよう。そうです。言葉は無駄です。思考は植物の生成みたいな自然現象です。

行くしかないんです」

哥舞伎がうんざり顔で、

「くだらねえ。じゃ、事務手続きを始めるか」

一同は参拝者が齋戒沐浴するための檜風呂に入り、禊をする。高貴で崇高で清らかな木の香り。その間にベ裂がてきばき家令に指示を出していた。皆が脱衣所に戻る頃には装備の用意が出来る。

ベ裂が皆に向かって言った。

「さあ、雨具はこれにした方がいい。

ここに来るまでに身に附いていた笠は邪魔になるし、蓑じゃ危ない。

見てくれ。米海軍 *the United States Navy* のレインウェアだ。防水で保温性も高く軽く

て丈夫だ。さあ、みんなこれを身につけるんだ。

それからグローブ。靴も用意した。サイズが合う奴を選んでくれ。

最後にヘルメットとインカム（ヘッドホンとマイクがセットになった通信機器）。これも防水になっている。

あ、ヘルメットの額にライトが附いているから外へ出たら忘れずに点灯してくれ。いや、そうじゃない、スイッチはこれだ」

さすがの哥舞伎も花魁の衣装を諦めた。背に腹は変えられない。「とうとう俺も妥協主義者だぜ！」

かくして一同は真夜中の野戦に向かう軍隊のように石段の細き参道に入った。出発地点の標高は百二メートル、時刻は午後七時五十分であった。

石段は一段一段が高く、足場となるべき段上の平面積は狭かった。しかも大きさが不規

則で、あちこちが毀たれ、傾いている。

何しろ二千年も前からあるのである。止むを得まい。

隊列は道を熟知するゞ裂を先頭に、叭羅蜜斗、哥舞伎、普蕭、春慶、大楽、隆臥、早蕨、最後に彝之家の者として道を知る龍肯が脱落者のないよう配備された。なお、ゞ裂と龍肯はリュックを背負っている。

「ゆっくり行くからな」

「真っ暗だぜ」

絶壁をどうにかつづら折りに行く道には柵も手摺もなかった。岩壁に肩でもぶつけてよろめこうものなら真っ逆さまだ。

「ふふあつ、雨のせいによく見えない」

「慎重に、慎重にな。一段一段丁寧」

「無理言うな、足に力が入らなくなってきた」

「ゆっくりでいいですから」

途中、樹木の繁った小さな岩棚に着いた。

「うわあ、もうだめだ」

大楽が早くも濡れた石の上にしゃがみこむ。

「休憩しよう」

普蕭が言った。

哥舞伎は唸りながらも頷く。「止むを得まい」

普蕭が時計を見る。

「では十五分の休憩だ。文句はないな、哥舞伎。ゞ裂が温かい飲み物をポットに容れて持つて来ている。少しいたどうか。」

八時五十五分に出発しよう」

カップに入ったスープが回される。手先が暖かくなった。頬に血行が戻る。

再出発して暫く登ると道が絶えて岩から岩へと手を突きながら足を広げ掛けて登る道になった。

標高二百八十九メートル地点到着。時刻は午後九時二十一分。

「ほらこれが」

ゞ裂の指差す方に何かが見えた。浅い洞窟だった。

「日本に初めて上陸した族長、神彝彌真斗かんいやむと（BC700 第三六六代）の祠だ。」

基本的に彝之家の正式な礼拝は当主がここまで来て行う。だが実際は曾祖父には無理なので、俺の親父か、俺が来るんだ。

だからここまでは熟知している」

照らして見ると、彝之家拝殿という扁額が洞の入口の上に掲げられてあり、安和之家、甕槌家、揖屋家が奉献者として名を刻んでいる。

「つまり彼らは日本に来てから主従の関係を結んだのだ。だから彝彌真斗に礼を奉っているのさ。

逆に言えばこれより上の段へは名を刻めないのだ」

「少し雨を凌いで休憩しよう」

そう言いながら、裂が再びリュックからポットとプラスチックのカップを出した。

「さあ、こいつで元気を附けるんだ。飲んでくれ」

午後九時四十五分、再出発。再び石段が現われ、安堵したのも束の間、登るとすぐに栈道が現われた。栈道とは絶壁に板などの足場を断崖などに打ち込んで造る道である。崑山の長空栈道が有名で、南嶺の絶壁に板三枚（幅三十センチか四十センチくらい）がとても簡素に架設されただけ、しかも所々で途切れ、そこはもう壁に穿たれた孔に足をかけて打ち込まれた鎖を手でつかみながら進むしかないという凄まじいものだ。

眞神の栈道もまさにそういう、宙空を歩くかのような心地のものであった。

「こんなものかよ、いくら何でも、こりや危なすぎないか。絶対足滑らせて落ちるぜ。特にこんな土砂降りじゃ」

大楽が喚く。

「確かに大楽君の言うとおりですよ。哥舞伎君、止めよう。こんな道だなんて。知らなかった」

早蕨が言う。しかし、

「いや。

行くぜ。

強制はしない。自信がない奴、逝きたくない奴は戻れ。恥じらうべきではない。それはそれで堂々果敢せよ」

大楽が首を振る。

「やれやれ……

おいらも先祖は軍人だったんだよな」

とは言うものの、あわや手を滑らせれば断崖絶壁を真っ逆さまである。人間に絶対安全がない以上、怖くて当たり前だ。

「おわつ、あ、こ、怖いぜ」 叭羅蜜斗。

「う、うわつ、す、滑った！」 哥舞伎。

「おい、ちよ、ちよつと待てよ、風が」 普蕭。

「死なんとすれば生き、生きんとすれば死す」 春慶。

「ああ、ああー」 大楽。

「……怖い」 隆臥。

「あ、やべえ、あ、ひええええー、まじでちようやばいつす」 早蕨。

棧道の途切れが途中に三メートルほどあったが、足を滑らせそうになりながらも、皆が通過する。

兎も角も無事で一応全員が安堵。到着した岩棚で、叭羅蜜斗も哥舞伎も普蕭も春慶も大楽も隆臥も早蕨も息も絶え絶え斃れる。

「これ、また帰日も通るんだな」

「帰りに通ればな」

暫し休憩。

そこには雷霆神である尹陀羅の神の祠があった。インド在住時代 (BC1500 第三二六～三六五代) を象徴するもので、雨海家や衆善家の名がある。再出発は午後十一時。

その先は巨大な石を登るルートで、丸みを帯びてつるりとした石壁を鉄鎖の梯子にしがみついて逝くものであった。しかも壁には雨水が走る。

「うわぁ」

足を滑らせて早蕨が思わず叫ぶ。

その足に頭を蹴られた龍肯は、

「よく気を附けろ、早蕨。土踏まずのところにうまく梯子を引っ掛けて、腕や肘も絡ませながら」

「わかつちやいるけど、やめられないのさ」

笑った。

一つの祠に辿り着く。

彝須灌斗の時代 (BC2500 第二七六～三二五代)、すなわちマケドニアからガンダーラを断続的に移住していた時代を象徴するもので、御彝火鎚の神、日曜 (ミール) の神の祠が

あった。天草家、八代家、葦原家、赤門家が奉獻者として名を刻んでいる。

「さあ、行くぜ」

哥舞伎が言う。

漆黒の中、毀たれた狭い石段を進む。

すぐに海上之大御神の祠が現われた。

それは葦之国の時代（BC3500第二二六～二七五代）、すなわちクレタ島在住の頃で、海彝斗が族長として道を開いたときである。早蕨の彝佐家や隆臥の平衛家（アンシヤル家）が名を刻む。アンシヤル、またはアスラと呼ばれる戦闘神が平衛家の氏神で、強さゆえに平衛は代々王家の近衛を務めた家であった。

隆臥も早蕨も誇らしい気持ちになる。

「何か元気出てきたな」

この時代は天平家が更に天易家へと分家した時代でもあった。

木の根や幹をつかみながら、岩でこつこつした垂直の荒壁を登る。石段があった。進む。

もう誰も何も言わない。

奈良飛鳥の地にある石舞台に似た、巨石を組んだ剥き出しの石室のようなものが現われた。これも祠であった。伊弉禰^{いてね}の神の像があり、第一の王として彝衆斗^{いしゅと}の名が刻まれている。これが戸璃鬼邇栖の地にいた時代（BC4500第176～225代）の祠、すなわちリビア在住時代だ。

この頃、彝之家は分家し、叭羅蜜斗の同源家が立った。憶測でしかないが、権力争いの一つの帰結であると思われる。しかし史記に記載がないので何もわからないし、わかりようもない。

さて、その時代は海洋民族であった白舟家が現われた時代でもあった。それゆえ三叉戟の家紋が神の像の傍に彫られていた。海神のシンボル、白舟の族の栄光と神聖の紋。

さらに又インドから来た炎家が『尹陀羅の同盟戦士』と呼ばれ、称讃され、眞神の国に加わった時代でもある。ゆえにアグニ^{अग्नि}神の神像があった。

神妙な顔で春慶と大楽が祠に向かい平伏した。

次は叩きつける雨の中、一本の鎖をつかんで足場のない岩の斜面を登る。洞窟があらわれた。壁面いっばいに神聖な文字が刻まれ、神殿のようである。

隼の神である竇（ハル）の神、またの名を穂瑠（ホル）の神の像があった。斐園良之都^{ひえらのみやこ}の時代（BC6000第101～175代）、すなわちエジプト在住の時代で、彝久那斗^{いくなと}が族長とし

て開いた時代であった。

天之家が現われ、太陽神である日羅帝神殺しの儀式が盛んだった時代だ。また天之家が分家して天平家が現われた時代でもある。于蛇斗うだとの神の像が参拝者を睥睨にらしていた。壁には文字と共に様々な彩色図画があり、邇に矛柳むらう大河の図もある。

「ナイルに見えなくもない」

「よく色彩が残っているな」

「逆に疑わしくもあるが」

「青はやはりラピスラズリ lapis lazuli (瑠璃) を粉末にした顔料だろうか」

「調べなくてはわかりませんね」

「いいから。休もうぜ」

そして二十分後。洞窟を出て再び豪雨の下。進む。

着いた場所は岩の壁であった。一条の亀裂が垂直に走っている。綱が垂れていて、それをつかみ、足を岩に引っかけ登る、らしかった。七か、八メートルくらいか。それが最後の試練であった。大楽が絶望的な声を上げる、

「無理だよ」

「気迫さ」

春慶がこともなげに言った。

「さあ、行くぞ」

最初にベ裂が登り、順に一人ずつ攀じ登る。大楽や普蕭や隆臥は二、三度足を踏み外して下がり、危うく落下かと思われる瞬間さえあった。「ううわああっ」ズルっ。「おお！」

瀕死の蒼白顔でついに全員が頂上に着く。午前〇時ちょうど。

「ああ、これが我らの存在の義の魂、究竟」

春慶が感激の声を上げる。大楽は膝を突いて、ぜいぜい。いや、皆同じようなものであった。ベ裂ですらしやがみ込んだ。

見渡せば頂上は平らかである。

「さあ、巨石の下へ」

ベ裂がやつと立ち上がり、厳粛に導く。龍肯の双眸がなぜか哀しみを湛える。それは崇高の感情の表れなのか。ここで死んだ人間を想うのか。彝之家の哀しみ。隆臥は不思議な、複雑な気持ちでそれを眺めた。歴史が人を支配する。

巨石の周囲にはいくつもの石が立てられ、環状をなしていた。高いものは数メートルあ

る。小さなものは三十センチメートルくらいであった。直下まで皆が来る。近くで見ると石刀状の磐の偉容は威圧的で、人心を乱し、畏れさせた。

真直ぐ屹立するそれは高さ二五メートルあるという。その下の方（それでも人間は見上げなくてはならない高さだが）、垂直の壁に聖の聖なる眞神文字の紋が刻まれていた。

「あれが眞理奥義の言葉、眞実そのものと謂われる『彝』の文字だ」

べ裂が照らし出したそれはIに似ていた。Eにも見えたが、どちらかと言えば匠に見えた。

一同の胸に崇高な感情が起こったが、何も思惟は訪れなかった。

「だめだな」

哥舞伎はさらりと言つてのけた。

「さ、降りるぜ。繰り返しさ」

大楽が両手を挙げて天を仰いだ。

「ああ、もう、ここで良いから、このまま斃れたいっ！」

龍肯が厳かな口調で、

「さあ、行きましょう。行くしか選択肢はないんです。それが現実です」

春慶も大楽の肩をびしゃつと叩きながら、

「さあ、さあ、俺たちは眞理に近附いているんだ。大義のために熱く燃えるぜ。命を惜しむな。そうすれば常に清々して息は深く身は軽く『莊子』内篇に「真人は踵で息をする」つて言うじゃないか、気概に満ちて憂いなく、幸福だ」

午前〇時四十九分。意気消沈の下山である。

「ゆつくりでいいから。よく気を付けて。しっかりとつかんで。足の運びを慎重に」

べ裂や龍肯は何度も皆にそう言った。叭羅蜜斗が、

「そうさ、理想は兎も角、まずは現実だ。転落しちまったら身も蓋もない」

ずっと黙して考え込んでいた哥舞伎が言う、

「龍吞へ行こう。そう、龍吞村だ。」

もちろん、あいつに会いに行くんだ。それしかない。他はない。有り得ない。この世はただ力だけが横溢して非情が権威を振るう物理的な世界だが、こんな無明なる現実の激流の中に立つ一本の棹があるとすればそれがあいつの叡智だ。生存の土石流を渡って彼岸へ到達するあいつの智慧の筏だけだ。さあ、行くぞ、眞分のところへ。

べ裂、おまえも来るだろ？」

「俺は最初からそう言いたかったんだぜ、哥舞伎よ。おまえは聞こうとはしなかった」
ベ裂が笑いながら応えた。

その様子を見ていた早蕨が言う、

「僕は今思い出しました……ヴィクトル・ユゴーの詩を。確か、上田敏氏の訳でしたが。素晴らしい名文でした。まだ文学が信じられていた時代………」

そうです、『良心』のカインみたいです。

何かに取り憑かれたように、神の眼に常に見張られて……。休むことも出来ずに駈られて……」

さて、一同はようやく襖の斎戒場まで辿り着く。午前五時十五分。誰もが雨でぐしょ濡れ、髪は張り付き、服は絞れるほどで、しかも泥だらけだった。疲弊し尽くし、困憊状態。

「さあさあ、風呂だ。風呂、それしかない。凍えて手に感覚がないよ。膝もがたがたで腿にも力が入らない」

大衆がよろよろと脱衣場の入口に凭れる。

檜の香り高い斎戒場は湯気に満ちていた。

「うわ、暖かい」

「助かった、ひや、極楽、極楽」

「最高だ、ローマの皇帝より幸せだ。少なくとも実存的にはそう感じる」

「生き返ったぜ」

「結局、我々が求めているのはこれなんだ。幸福とは無事のことだ」

隆臥が深々溜息しながら言うのであった。

「幸福とは……無事か。意外に至言かもしれない」

「いや、絶対だね。現実がすべて。実存が優先さ。幸せとは幸せと感じられることだ。他は皆面倒臭い屁理屈さ。机上の空論さ。所詮、おいらたちは動植物なのさ(笑)」

誰もが堪能する。湯の音が満ちる幸福。連絡を受けた家令が再度着替えを運んで来た。

桧と柄杓と酒樽とともに。

「さあさあ、どうぞ。暖まってください」

樽が開けられ、柄杓でつがれた酒が次々振舞われる。桧を手に入れば芳醇なる樹木の香りが鼻腔を清める。寿司桶いっぱいのお鮓も運ばれて来た。

「かー。幸福だぜ。春爛漫だ。このまま憩い眠りたい」

叭羅蜜斗がそう声を上げた。

「おいら、さっきからそう言ってるんだぜ」

大楽が言う。隆臥も早蕨も同感だった。しかし。

「いや、少々休憩したら行く」

哥舞伎が言い放った。

風呂場を出ると未だに止まぬ豪雨だ。

「ああ、思ったとおりだ……正直、もう、うんざりだな」

大楽のぼやきは止まらない。一同はまたも笠と蓑で身支度をして歩き、屋敷で自分たちが着て来た服に着替え、眞神を降りて橋を渡る。

叭羅蜜斗は再びアメリカン・ヴィークルのハンドルを握った。ダッジは八人乗りゆえ、爆裂は家令にロールス・ロイス *Rolls-Royce* のファントム *New Phantom Landauette De Ville 1927* を運転させる。午前六時十分。

真つ暗な溪峽を下ってまたも田圃の中の古街道を進む。龍吞村は畝邨よりも西にあった。暫く行くと、「今何時だ」と春慶が呟く。眠たげな眼で。暖房が効いてきたのだ。体が蕩けるように緩む。

「六時二十九分三十二秒ですね」

早蕨がどうかそう呟えた。その言動は彼の自慢の時計を見せるためでもある。人は、いやすべての生物はそうしなければならないのだ。

今日、彼がしていたのはロメオ・フェラリス *Romeo Ferraris* であった。こだわりあるも無理はない。早蕨は普段、東京の某大学御用達の時計店に勤務しているからだ。

給料は高くない。ただ時計に興味があったから勤めている。しかしそんな安月給でも都内の高級マンシヤンに住む。眞神の一族にとって労働は魂を疵附けるもので、仕事は生きる術ではなく、死の執行までの暫時の猶予を過ごす暇つぶしなのであった。

「しかもどうやら夜明け前ですよ」

龍肯がそう附け加えた。朝日はどこにあるかわからないが、確かに薄明るくなってきた。龍吞村に入る。

「雨が少し衰えたような気がするが。黎明か」

普肅は呟くが、既に誰も呟えない。大楽は座席でぐーぐー。早蕨はうとうと。春慶も隆臥も龍肯も熟寝^{うまい}を貪る。諦めたような薄笑いで普肅はクールに雨当たる窓に頬よせていた。哥舞伎の眼だけが爛々とし、叭羅蜜斗は只管眠気^{ひたすい}に堪えてハンドルをどうにか握っている。

村のメインストリートは龍吞神社への参道だ。街道を曲がってダッジバンは路に入った。濡れた石畳の路。雨は小降りになっている。黎明が感じられた。

龍吞村の中心となる集落はあたかも京都の町家のように家の正面が並び、うなぎの寝床のように奥に深い。大概の家は正面の脇に格子戸があり、そこから土屋根の下、土間が連続したかのような、半家内半路地のような、石の敷かれた路がある。最初の格子戸をくぐる事が可能ならば自転車や小振りなフォークリフトなどが十分に通れるぐらいの路だ。誰でもが通れるわけではないが、私的なスペースでありながら半ば公共スペースである。

真分の家は骨董屋だった。

雨は霧雨に戻り、ダッジバンが停ると一同は降車し、背伸びをしたり、手の甲で眼を擦ったりした。哥舞伎が硝子戸を引いて店に顔を突っ込むと、

「ああ、茶室にいるよ」

と婆さんに言われ、店の脇にある格子戸を開けた。哥舞伎、裂、普薫、叭羅蜜斗、春慶、大楽、隆臥、龍肯、早蕨の順で路を逝く。一番奥が広い庭で、その中を特に仕切った垣を開け、露地に入る。飛び石を渡り、落葉の泛かぶ蹲踞の傍らを通る。苔生す庭石。

行くと庵があり、躡口に脱ぎ捨てられたロングブーツがその存在を明らかに告げる。弛んで弛んだハイソックスみたいな蛇皮のそれが。

その柿板葺の茶室は真分の曾祖父であった真髓之丞左右衛門が造ったもので、瑠璃蒼苅鱗雷霆光燦裂庵という凄まじい命名がされている。彼はそこで著述を推敲していた。

天易真分、相変わらずその風体は奇妙奇天烈だ。

大きくて派手なカフスの附いた水色の縐子地の膝丈ミリタリーコート。カフスは螺鈿のボタンで留められ、レースの飾りを翻す。コートには肩飾り、房飾り、金の飾り紐で満艦飾。黒い帽子はウィザードハット。山（クラウン）が高くどがって鰐（フリム）が広い。しかもクラウンは途中で折れ翳れている。

片眼鏡をかけ、腕にはブライトリングの CHRONOMAT B01 ミラージュレッド／ゴールド・インデックス、臍に届くくらい長い口髭顎鬚頬髯を伸ばし、スキニーなリーヴァイスの16オンスを穿いてマッチ棒みたいな脚がさらに棒のように見えた。

キラバッシュ・パイプ（キラバッシュ（南アフリカ産の瓢箪）をボディにし、煙草を入れるボウルにメシヤム（海泡石）を使ったもの）を愛用し、今も傍らに置いている。

真分は振り向くと手に持っていた筆を攔き、皆が躡口から順々に入って来るのを見ていた。狭いので肩をぶつけながら場に落ち着くの若干の時間がかかる。哥舞伎が一頻り顛

末を説明した。すると真兮は小脇から何かを持ち出す。

「ならば、これを見たまえ」

何てことない古い茶碗だった。ㄨ裂が手に取る。景色を眺めて普蕭に渡す。普蕭は眼鏡の位置を直して精しく検分する。覗き込むように隆臥が肩越しに。春慶や大楽や龍肯や早蕨はただその後ろで呆然。叭羅蜜斗はぼんやり外を見ていた。彼らの様を横眼で見ながら哥舞伎が、

「これが何だってんだ、真兮」

「無論、そういうことだ」

「え？」

「これは四百年前の李王朝の雑器に過ぎない。つまり本国では価値のないただの生活用品だった。それでも、いや、それゆえに日本では、冷える、凍える、寂びた、枯れた、と評価された。粗製ゆえに。見たまえ。銜いのない、ありふれた日常から切り取られた、粗末な雑品だ。ふ。」

どうかね。

おや、何が？という顔をしているね。これは困った。これ以上の適切な表現は考えられない。だから何かと重ねて訊くのかい？

いやはや、これこそが諸君の探していた答じゃないか」

言い終えると再び巻物を前に筆を取り、推敲の作業に戻ってしまった。これですべてが終わりなのである。

哥舞伎が腕を組んで唸った。普蕭は深く頷き、ㄨ裂が感服したと言わんばかり満面の笑みを浮かべ、叭羅蜜斗は無関心に外を眺めていた鼻尖を戻して状況がよくわからないくせにわかったふりでフンと鼻を鳴らし、唇の左側だけを持ち上げる。春慶が合点のいかぬ顔で左右を見るも、龍肯はただ顎に掌を当て考え込むばかり。大楽はばあかんとして隆臥が無表情、早蕨はヒューと口笛を鳴らす、

「結局、僕らノー・サティスファイド、Can't get enough っついですか」

「そういうもんさ」

真兮が振り向かず言った。哥舞伎が、

「くだらねえや。『雨龍』で呑み直すか」

そう言って桜花爛漫や秋錦繡の艶やかな金欄緞子を翻す。